

Title	赤外線画像解析による『世界四大洲新地図帳』の書誌的研究( Abstract_要旨 )
Author(s)	益満, まを
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2009-03-23
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/123941">http://hdl.handle.net/2433/123941</a>
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

新制

人

113

## 学位審査報告書

(ふりがな)	ますみつ まを
氏名	益満 まを
学位(専攻分野)	博士(人間・環境学)
学位記番号	人博 第 462 号
学位授与の日付	平成21年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科 共生文明学専攻
(学位論文題目)	<p>赤外線画像解析による『世界四大洲新地図帳』の書誌的研究</p>
論文調査委員	主査 教授 松田 清 副査 教授 稲垣 直樹 副査 教授 川島 昭夫

人間・環境学研究科

氏名

益満まを

(論文内容の要旨)

本学位申請論文は、江戸時代におけるオランダ系天文地理書の翻訳に最大の功績をあげた阿蘭陀通詞本木良永(1735-1794)が寛政2年(1790)に老中松平定信の命を受けて翻訳した舶載オランダ製地図帳、コーフェンス、モルチール社刊『世界四大洲新地図帳』*Nieuwe atlas, inhoudende de vier gedeeltens der waereld*. Amsterdam, Johannes Cóvens en Cornelis Mortier, [ca.1783]. 2 vols. (静岡県立中央図書館葵文庫所蔵、以下『新地図帳』と略す)について、化学変化のため金紙や銀紙が黒色に変化し大半が判読困難となった膨大な地名訳語の付箋(総数3155)を近赤外線撮影し、画像解析によって得られた解読結果を基に訳語の分析を行い、良永の翻訳過程を明らかにしようとしたものである。

第一章「本木良永の天文地理関係訳業」では、『新地図帳』の訳語付箋を良永の訳業のなかで位置づけるために、最初の訳業である「阿蘭陀地図略説」(1771)や『新地図帳』の抄訳「阿蘭陀全世界地図書訳」(1790)を含め、良永のおもな天文地理関係訳業16点を、それぞれのオランダ語原書同定にかかわる研究史とともに概観した。また、『新地図帳』が良永によって翻訳されたのち、寛政文化年間の北辺関係地図編纂において、近藤重蔵(1804)、桂川甫周(1807)、山田聯(1809)らに利用され、重政堂田善が銅版画の典拠に利用したことを先行研究によって記述した。クーマン『オランダ版地図書誌』(1969)および最新のファン・エフモント『コーフェンス、モルチール社の出版史的研究』(2005)を参照して、『新地図帳』が注文出版であり、収録図数が注文者によって変化する特異な出版カテゴリーに属することを指摘した。

第二章「『世界四大洲新地図帳』の書誌」では、まず、収録地図の出版年の下限を出版社名の変遷により1787年と判定し、地図に使用された洋紙からウォーターマークを読み取りCornelis & Jacob Honig製であることを指摘した。つぎに、申請者が葵文庫において行った近赤外線CCDカメラによる撮影方法を説明したうえで、上冊90図、下冊88図の各図の標題付箋の解読結果を原本の手書き欧文目次と対照させて表示し、松田清・富井洋一・富田良雄共編『静岡県立中央図書館葵文庫所蔵『世界四大洲新地図帳』目録』(2005)の欠を補った。

第三章では『新地図帳』上冊第1図デ・ウィットDe Wit「半円两天図」の書誌的記述を行い、松浦静山旧蔵スヘンクSchenk刊行『縮刷サンソン世界地図帳』(松浦史料博物館所蔵)所載の半円两天図との類似を指摘したのち、良永によるラテン語星座名の翻訳過程を分析した。すなわち、「阿蘭陀全世界地図書訳」で書名があげられているラテン語辞書類では星座に関する知識が十分に得られないこと、黄道十二宮の訳語、および主

な天文用語は良永がヒュプネル『古今地理略説』Johan Hubner, *Kort begryp der oude en nieuwe geographie*. Amsterdam, 1722.から翻訳した「阿蘭陀地図略説」(1771)と一致すること、また、音訳に留まる北島見信「紅毛天地二図贅説」(1737) およびそれに依拠しつつ別系統の訳名を付加した前野良沢「西洋星象略解」(成立年代不明)とは対照的に、良永はオランダ語の原義を正確に翻訳し、「正訳」を重視することを明らかにした。

第四章では、『新地図帳』の地名訳語の分析を行う。まず、地名訳語を(1)各図の標題、(2)都市名、地方名、(3)海洋、河川、島名に分類したうえで、各図の標題訳はその国名を漢字で音訳し、漢字の右側にラテン語名を片仮名で表記し、漢字の左側に別名やオランダ語名を片仮名表記することが多いこと、地名は漢字による音訳よりはオランダ語読みの片仮名表記が多いこと、を指摘した。また、Insula(島)の省略記号I.を島名の一部とするなどの誤訳例や、少数ながら義訳する例も挙げている。さらに、(5)良永が促音と拗音を表すために特徴的な仮名表記法を使用したこと、(6)ヒュプネル『古今地理略説』1736年版から類推して、良永がラテン語地名については同書1722年版を利用した可能性が高いことを指摘した。

つぎに、上下2冊で計3155にのぼる付箋の地図ごとの分布図を作成し、付箋数の多い上位7図のなかでも、上冊第1図「半円両天図」が229枚と突出していることを示した。最後に、泉屋家文書『阿蘭陀全世界地図書訳素稿』(シーボルト記念館蔵)の現地調査を踏まえ、復元可能な地名および訳語を2072確認し、この素稿にみえる国名のほぼすべてが地名と同じく片仮名表記であることをのぞけば、『阿蘭陀全世界地図書訳素稿』付箋と『新地図帳』付箋とがほぼ一致することを確認した。

本論文巻末の資料編には、【資料1】『世界四大洲新地図帳』付箋訳語対照表』として、上冊1681枚、下冊1474枚、計3155枚の付箋の解読結果を、各付箋に対応する原図の欧文表記とともに掲げた。【資料2】「本木良永による黄道十二宮名訳語対照表」では、「阿蘭陀地図略説」(1771)、「阿蘭陀地球図説」(1772)、「阿蘭陀全世界地図書訳」(1790)、『新地図帳』にみえる黄道十二宮名訳語を対照させた。【資料3】「西洋星座名訳語対照表」では、前野良沢「西洋星象略解」、本木良永「阿蘭陀全世界地図書訳」、『新地図帳』天球図のラテン語星座名とその訳語および現行の星座名を対照させた。【資料4】では、『新地図帳』上冊第73図から第76図の付箋と、それに対応する泉屋家文書『阿蘭陀全世界地図書訳素稿』収録の付箋計45種とを原本の欧文表記とともに掲げ、【資料5】として全付箋の3分の1弱にあたる『阿蘭陀全世界地図書訳素稿』翻刻(抄)を付した。

氏名

益満まを

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、阿蘭陀通詞本木良永が老中松平定信の命を受けて翻訳したコーフェンス、モルチール社刊『世界四大洲新地図帳』（静岡県立中央図書館葵文庫蔵、アムステルダム、1783年頃刊、上下2冊、デラックス・フォリオ判、以下『新地図帳』と略す）の各冊前付け頁および通計178図の天球図・地球図・各地図に付された金紙銀紙の付箋、通計3155枚に墨書され、化学変化のため判読困難になった訳名を、近赤外線 CCD カメラによる撮影で得られた画像の解析によって解読し、良永の翻訳過程の解明をめざした点で、従来の書誌的調査には見られない斬新な手法による調査研究であり、注目に値する。

本論文を評価する際に考慮すべきことであるが、対象となった地図帳は徳川家旧蔵書葵文庫の特別貴重書として閲覧制限の厳しい資料であり、月1回の指定された閲覧日にも、調査撮影を特別に許可された。そのため、撮影機器類の準備改良もあり、必要な撮影データを収集するのに2年半の歳月を要した。こうした制約を乗り越え、申請者が画像解析ソフトを駆使して地道な解読作業を達成し、さらに、しばしば付箋によって部分的に覆われたフランス語、ラテン語を主とする原語表記を復元したこと、また、『新地図帳』全図の高精細画像を所蔵図書館ホームページで公開する事業において、申請者が研究協力者として貴重な貢献をなしたことは特筆すべきである。

本論文の第一の成果は、オランダ系天文地理関係翻訳史において最大の足跡を残した本木良永の訳業のなかで従来解読不可能であった大量の星座名訳語、地名訳語を、本論文の資料編によって、江戸時代における天文地理情報の受容史、翻訳史、国語研究に提供したことである。こうした書誌的研究は人文学の基礎をなすものであり、蘭学研究においても貴重であり評価すべきである。

第二の成果は、『新地図帳』のみならず、良永の地理関係訳業全体を従来の研究史を踏まえて概観し、オランダ語原書との照合による翻訳研究の重要性を示唆した点である。従来、ヒュプネルの数種の地理書が初期蘭学系地理情報の典拠として重要であることは知られてきたが、本論文で、良永の最初の訳業「阿蘭陀地図略説」(1771)のオランダ語原書であるヒュプネル『古今地理略説』(1722)を良永が『新地図帳』翻訳に際しても利用したことを、その1736年版の調査から推測したことは重要である。1722年版は世界的に稀観書であるが、ヒュプネル地理書のオランダ語版がコーフェンス、モルチール社の出版活動と密接な関係があり、1736年版自体、これを同社が出版したことを考慮すれば、本論文は『古今地理略説』と『新地図帳』の両者を良永が利用した意義を今

氏名

益満まを

後明らかにする可能性を切りひらいた。

第三の成果は、ラテン語星座名翻訳の分析によって、対応するオランダ語の原義を踏まえた「正訳」を重視し、これを従来の漢訳名に対置している良永の特徴を明らかにしたことである。この特徴は、漢字による音訳に留まった北島見信「紅毛天地二図贅説」(1737) およびそれに依拠しつつ漢訳名を付加した前野良沢「西洋星象略解」(成立年代不明)と対照をなすものであり、本論文は、星座名に関する詳細かつ多数の画像解読データとともに、江戸時代における西洋星座名の受容史研究に大きく貢献している。

本論文は、たとえば、『新地図帳』に収録された地図の圧倒的多数がドゥ・リール、デ・ウィット、サンソンなど1740年代までに刊行された既刊地図に若干の修正を加えたものであること、また、アメリカ独立革命以後の新情勢を反映した地図やオランダ植民地の詳細な地図も含まれていること、これらを踏まえた上で、『新地図帳』に表現されている18世紀ヨーロッパ世界の地理情報、地理認識を分析する視点を欠いている。しかしながら、総体として、斬新な調査研究手法、基礎データの提供、江戸時代の蘭学系天文地理書翻訳史の原典的研究への貢献によって、高く評価できる。

よって、本論文は博士(人間・環境学)の学位論文として価値あるものと認める。また平成21年1月29日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。